



杜甫はいつから「詩聖」になったか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007530

杜甫はいつから「詩聖」になったか

後 藤 秋 正

はじめに

杜甫の「聖化」は北宋・仁宗の慶暦年間（一〇四一〜一〇四八）に、王安石（一〇二一〜一〇八六）らによって始まったとされる。例えば陳善『捫蝨新話』（蔡夢弼『草堂詩話』卷上引）は、

老杜詩、当是詩中六経、他人詩乃諸子之流也。

老杜の詩は、当に是れ詩中の六経なるべし、他人の詩は

乃ち諸子の流なり。

という。また葉適（一一五〇〜一二二三）の「徐斯遠文集序」

（『水心集』卷一二）は、

慶暦・嘉祐以来、天下以杜甫為師。

慶暦・嘉祐以来、天下 杜甫を以て師と為す。

と指摘するし、『蔡寬夫詩話』（『竹莊詩話』卷一六引）は、

景祐・慶暦後、天下始尚古文、於是李太白・韋蘇州諸人、

乃雜見於世、杜子美最為晚出。三十年來學詩者、非子美不

道、雖武夫・女子皆知尊異之。

景祐・慶暦の後、天下始めて古文を尚び、是に於いて李太白・韋蘇州の諸人、乃ち雜わりて世に見る、杜子美は最も晚出為り。三十年來 詩を學ぶ者、子美に非ざれば道わず、武夫・女子と雖も皆な尊びて之を異とするを知る。とまで述べている。

それでは杜甫はいつから「詩聖」の語をもって称されるようになったのであろうか。

鈴木虎雄「杜少陵詩集総説」（『続国訳漢文大成 杜少陵詩集』上、国民文庫刊行会、一九三一）は、以下のように述べる。

……「詩聖」の語は誠に楊誠齋に本く。聖とは通ぜざること無き、或は制作の力を具ふるものの謂なり、楊氏の意蓋し詩の極致を得たるもの、第一人者といふが如き義にとれるなるべし。詩人に対しては此以上の讚辭は有らざるなり。

ここにいう「楊誠齋に本く」とは、南宋の楊万里（一一二四

（一二〇六）、字は廷秀の「江西宗派詩序」（『誠齋集』卷八〇）での発言を指している。

……今夫四家者流、蘇似李、黃似杜。蘇・李之詩、子列子之御風也、杜黃之詩、靈均之乘桂舟、駕玉車也。無待者、神於詩者歟、有待而未嘗有待者、聖於詩者歟。

……今夫の四家者流は、蘇は李に似、黄は杜に似たり。

蘇・李の詩は、子列子の風を御するなり、杜・黄の詩は、靈均の桂舟に乗り、玉車に駕するなり。待つ無き者は、詩に神なる者か、待つ有りて未だ嘗て待つこと有らざる者は、詩に聖なる者か。

「四家者流」とは、李白、杜甫、蘇軾、黃庭堅を指す。鈴木氏はここから楊万里が杜甫を詩聖と見なしたというのだが、「詩に聖なる者」とは杜甫のみを指しているとは判断できない。興膳宏『杜甫』序章（岩波書店、二〇〇九）は、次のようにいう。

杜甫は、しばしば「詩聖」と称されて、歴代詩人の最高峰に位置づけられる。「詩聖」とは、詩における聖人、すなわち最も完璧な詩人の意味である。こうした呼称は明代以降になつてから生まれたものだが、現在でもなお杜甫を古今最高の詩人とする評価は揺らいでいない。

ここでは「詩聖」の語が「明代以降」に生まれたと述べられているが、実態はどうなのであるか。以下、「詩聖」の語がいつごろから杜甫に対して用いられるようになったのか、その実態を探ってみたい。

一

まず辞書類を一瞥してみよう。『漢語大詞典』はこの語を四項に分けて説明する。先に②を見ると、李白を指すとして、以下のような出典を挙げている。

清・屈大均《采石題太白祠》詩、「千載人称詩聖好、風流長在少陵前。」自注、朱紫陽（朱熹）嘗謂太白「聖於詩」。祠上有亭、当翠螺山頂、予因題曰、「詩聖亭」。

これによれば、明末から康熙年間（一六六二～一七二二）にかけての人である屈大均（一六三〇～？）、字は翁山、号は介子（采石題太白祠）において「千載人称詩聖好、風流長在少陵前（千載、人は称す詩聖の好きを、風流、長に少陵の前に在り）」と詠じ、その「自注」で朱熹（一一三〇～一二〇〇）が李白のことを「詩に聖なり。」と語ったことになる。したがって李白も詩聖と称されていたことが知られる。翠螺山は采石山（安徽省馬鞍山市の西南）の別名。

杜甫について『漢語大詞典』は「①指唐杜甫。」として以下のように述べている。

語本宋秦觀《韓愈論》、「猶杜子美之於詩、實積衆家之長、……孟子曰、「伯夷、聖之清者也。伊尹、聖之任者也、柳下惠、聖之和者也、孔子、聖之時者也。孔子之謂集大成。」嗚呼、杜氏・韓氏亦集詩文之大成者歟。」清葉燮《原詩・外篇上》、「詩聖推杜甫。」梁啓超《情聖杜甫》、「杜工部被後人上他徽号叫做「詩聖」。」

ここでは「詩聖」の語が北宋の秦觀（一〇四九—一一〇〇）、

字は少游の「韓愈論」（『淮海集』卷二二）に見える「猶お杜子美の詩に於ける、実に衆家の長を積むがごとし、……孟子曰く、「伯夷は、聖の清なる者なり。伊尹は、聖の任なる者なり。柳下恵は、聖の和なる者なり。孔子は、聖の時なる者なり。孔子は之集めて大成すと謂う。」と。嗚呼、杜氏・韓氏も亦詩文集めて之大成する者ならんか。」という一文に基づくことが指摘される。秦觀はこの文中、『孟子』万章章句下を引く前に、「……然不集諸家之長、杜氏亦不能独至於斯也。豈非適当其時故耶（……然るに諸家の長を集めずんば、杜氏も亦独り斯に至るのと能わざるなり。豈に適たま其の時に当たたるが故に非ずや）。」といい、孔子が伯夷、伊尹、柳下恵の美点を集めて大成したように、杜甫は蘇武・李陵、曹植・劉楨、陶潛・阮籍、謝靈運・鮑照、徐陵・庾信の長所を集大成したと述べている。秦觀は直接的に杜甫が詩における聖人であると見なしているわけではない。文における韓愈と並んで詩における集大成者である点で「聖」と見なしたのである。ついで引かれる明末清初の人、葉燮（一六二七—一七〇三）の『原詩』外篇上には確かに、「詩聖」の語が用いられる。

詩聖推杜甫、若索其瑕疵而文致之、政自不少、終何損乎
杜詩。俗儒於杜、則不敢難。若今人為之、則喧呶不休矣。

詩聖は杜甫を推す、若し其の瑕疵を索めて文もて之を致さば、政すこと自ずから少なからざるも、終に何ぞ杜詩を損わん。俗儒の杜に於けるや、則ち敢えて難ぜず。若し

今人之を為さば、則ち喧呶して休まず。

葉燮は同書において「杜甫之詩、独冠今古（杜甫の詩は、独り今古に冠たり）」ともいう。しかし彼は無条件で杜甫の詩を絶対視しているのではなく、「在杜則可、在他人則不可（杜に在れば則ち可なるも、他人に在れば則ち可ならず）」という、杜甫だから瑕疵が許されるという態度を認めているわけではなく、批判的に継承することを薦めているのである。

下孝萱主編『唐代文学百科辞典』（漢語大詞典出版社、二〇〇三）「詩聖」の執筆は喬長岐は、「①指詩歌創作成就達到最高峰的詩人。」として明・楊慎（一四八八—一五五九）、字は用修、号は升菴の「周受庵詩選序」（『升菴集』卷三）から、唐則陳子昂海内文宗、李太白為古今詩聖。

唐は則ち陳子昂は海内の文宗、李太白は古今の詩聖為り。という一文を引き、「②指唐代杜甫。」として、二点の典故を示す。まず明末清初の人で、『杜臆』の著者として知られる王嗣奭（一五六六—一六四八）、字は右仲の「夢杜少陵作」（『杜詩詳注』諸家詠杜）を載せる。その冒頭に次の句がある。

青蓮号詩仙 青蓮は詩仙と号し
我翁号詩聖 我が翁は詩聖と号す

この詩について王嗣奭「杜臆脱稿覆閱漫題」（『杜詩詳注』諸家詠杜）の注に引く、清・李鄴嗣（一六二二—一六八〇）の一文には以下のような指摘がある。李鄴嗣、字は臬堂は、順治年間（一九四四—一六六一）の書生。

王公右仲、少有異才、長通文史、尤嗜杜少陵詩。嘗夢至

草堂、与杜公对酒談詩。後知涪州、以事赴錦官城、拜少陵祠下、仰瞻遺像、髣髴夢中。

王公右仲は、わかくして異才あり、長じて文史に通じ、尤も杜少陵の詩を嗜む。嘗て夢に草堂に至り、杜公と酒に對して詩を談ず。後に涪州に知たり、事を以て錦官城に赴き、少陵の祠下に拜し、仰いで遺像を瞻るに、夢中に髣髴たり。

さらに顧廷竜「影杜臆前言」(影印本『杜臆』中華書局、一九六二)のち『杜臆』上海古籍出版社、一九八三にも収録)には以下のような説明がある。

万曆庚子(一六〇〇)中郷拳、壬寅(一六〇二)夢杜少陵於草堂、解衣沽酒、相對談詩、作五古一首。這是他嚮往於詩聖最早的一首歌詠。

また「前言」によれば、実際に王嗣爽が成都の浣花草堂を訪ねて「浣花草堂、二首」を詠じたのは崇禎八年(一六三五)のことである。

『唐代文学百科辞典』は次に潘德輿(一七八五〜一八三九)、字は彦輔の『養一齋李杜詩話』巻一から、

子美為「詩聖」、而太白則謂之「詩仙」、万口熟通、牢不可破・

子美を「詩聖」と為して、太白は則ち之を「詩仙」と謂うは、万口熟通し、牢なくして破る可からず。

という指摘を引いている。ここから清代中期頃には李白を詩仙、杜甫を詩聖と区分する認識が定着していたことがわかれるが、『唐代文学百科辞典』は、さらにこの一文に按語を付して

以下のようにいう。

按、前人称杜甫為「詩聖」、一是因為其詩創作成就高、具有「集大成」的地位、北宋秦觀說、「子美之詩、實積衆家之長、適當其時而已。」又說、「孟子曰、「……孔子聖之時者也、孔子之謂集大成。」嗚呼、子美其集詩之大成者歟。」(『杜詩詳注・諸家論杜』引)此論實為「詩聖」說之濫觴。二是前人認為杜詩合乎儒家聖人思想、如宋趙次公「草堂記略」謂杜「出處每与孔孟合」(同上)。

秦觀の発言を引いてこれを「詩聖」說の濫觴とするのは『漢語大詞典』と同じである。なお南宋の趙次公、字は彦輔の「杜工部草堂記」(『成都文類』卷四二、「杜詩詳注」附編)から、「出處每与孔・孟合(出處は毎に孔・孟と合す)。」という一文を引く。これは嚴密には趙次公が「惟杜陵野老、負王佐之才、有意当世、而骯髒不偶、胸中所蘊、一切写之以詩(惟だ杜陵の野老のみ、王佐の才を負い、意、当世に有りて、骯髒として偶せず、胸中の蘊おぼむる所、一切、之を写すに詩を以てす)。」と述べて杜詩の句、「許身一何愚、自比稷与契(身を許すこと一に何ぞ愚かなる、自ら稷と契とに比す)」(『自京赴奉先県、詠懷五百字』)、及び「致君堯舜上、再使風俗淳(君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳あからしめん)」「奉贈韋左丞丈、二十一韻」を引いた後に、「至其出處、每与孔・孟合(其の出處に至りては、毎おに孔・孟と合す)。」と記すのであって、杜甫の詩がすべて「儒家聖人思想」と合致していると言っているわけではない。

二

こうした、王嗣奭の詩が杜甫を「詩聖」と称する濫觴となつたとする説に対して異論を唱えたのが韓成武「詩聖」一詞首出于楊慎「詞品・序」(「杜甫新論」河北大学出版社、二〇〇七所収。以下、『新論』)である。『新論』は、まず楊万里が杜甫を称して、「聖於詩者(詩に聖なる者)」と述べたことを妥当だと認めたくえで、誰が杜甫に「詩聖」の尊称を与えたのかと疑問を呈する。一般的には先に引いた王嗣奭「夢杜少陵作」と、同じく王嗣奭「浣花草堂、二首」(其二)(「杜詩詳注」諸家詠社)の冒頭に、

詩聖神交蓋有年 詩聖 神交すること蓋し年有り
到來追想一悽然 到り來つて追想すれば一に悽然たり

とあるのが例証とされるが、王嗣奭より早く、楊慎の『詞品』序に以下のような指摘があるという。

詩詞同工而異曲、共源而分派。……若唐人之七言律、即填詞之「瑞鷓鴣」也。……孟蜀之「花間」、南唐之「蘭畹」、則其体大備矣。豈非共源同工乎。然詩聖如杜子美、而填詞若李白之「憶秦娥」、「菩薩蠻」者、集中絶無。

詩詞は工を同じくして曲を異にし、源を共にして派を分かつ。……唐人の七言律の若きは、即ち填詞の「瑞鷓鴣」なり。……孟蜀の「花間」、南唐の「蘭畹」は、則ち其の体 大いに備わる。豈に源を共にし工を同じくするものにならずや。然るに詩聖 杜子美の如きも、而して填詞 李白

の「憶秦娥」、「菩薩蠻」の若き者は、集中に絶えて無し。

楊慎は、詩と填詞は「工を同じくして曲を異にし」、「源を共にして派を分かつ」ものであるが、杜甫のような「詩聖」でも李白の填詞のような作品は集中に見られないと主張する。『新論』ではこれが「詩聖」の語が杜甫を指す、最も早い用例だと見なすのである。さらにこの語が見過ごされていたのは、楊慎の著作では「升庵詩話」ばかりが注目されて、『詞品』に注意が及ばなかったためだという。『新論』はさらに「詩聖」の語が「升庵詩話」卷十一の「評李杜」の条から出ているというのは誤認であるとして、『詞品』序を引くのである。確かに『升庵詩話』には、李白と杜甫の詩について、

二公之評、意同而語亦相近。余謂太白詩、仙翁劍客之語、少陵詩、雅士騷人之詞。比之文、太白則史記、少陵則漢書也。

二公の評は、意同じくして語も亦相い近し。余謂うに太白の詩は、仙翁劍客の語、少陵の詩は、雅士騷人の詞。之を文に比うれば、太白は則ち史記、少陵は則ち漢書なり。という指摘はあるものの、杜甫を「詩聖」とする記述はない。『新論』が結論として、『升庵詩話』を、杜甫を「詩聖」と称する出処と見なすことは適切ではないと指摘するのは妥当である。

三

ここで「聖於詩者」という指摘についていくつかのことを補つ

ておこう。

冒頭に見た『漢語大詞典』は屈大均の自注を引いていたが、この言い方は『朱子語類』巻百四十にも見え、李白に対して「蓋聖於詩者也（蓋し詩に聖なる者なり）」といっている。これが杜甫について用いられるようになるのは元・任士林（一二五三～一三〇九）、字は松卿からであろう。彼の「浄香亭記」（『松卿集』巻二）に、

若子美非聖於詩者歟。

子美の若きは詩に聖なる者に非ざるか。

とある。もっぱら李白について用いられていた評語が、このころから杜甫についても用いられるようになったのである。宣徳八年（一四三三）の進士、明・李賢（一四〇八～一四六六）、字は原徳が景泰三年（一四五二）に書いた「賡詠杜律序」（『古穰集』巻七）は、

世称杜詩冠絶古今、以為聖於詩者。詩至於是、天下能事畢矣。

世に杜詩は古今に冠絶すと称し、以て詩に聖なる者と為す。詩は是に至って、天下の能事^{わざ}畢れり。

といっている。このころには杜甫が「詩に聖なる者」であるという見解が流布していたのである。もう一例を挙げておくと、明・邊貢（一四七六～一五三二）、字は華泉が正徳十二年（一五一七）に書いた「題空同書翰後」（『華泉集』巻一四）に、「魯公聖於書者也、子美聖於詩者也（魯公は書に聖なる者なり、子美は詩に聖なる者なり）」とあって書における顔真卿と並んで

言及されている。表題の「空同」とは空同子と号した李夢陽（一四七二～一五二九）を指す。

四

それではこれまでに見てきた例以外に杜甫を「詩聖」と称したことはないのだろうか。

晁以道（一〇五九～一一二九）、字は説之の「涼州女」（『景迂生集』巻五）の末聯には次のようにある。

逢著澄江悔不詠 澄江に逢著して詠ぜざるを悔ゆ

功曹豈自誇詩聖 功曹 豈に自ら詩聖なるを誇らんや

功曹が誰を指すかについては不詳。これは詩中に「詩聖」の語を用いた早い例である。杜甫は華州司功參軍となったことはあるが杜甫について言ったものではない。明の成化二十三年（一四八七）の進士、費宏（一四六八～一五三五）、字は子充の「題蜀江圖」（『石倉歷代詩選』卷四三〇）には次の句がある。

杜從夔府称詩聖 杜は夔府より詩聖と称され

程向涪中伝易学 程は涪中に向いて易学を伝う

程とは程頤（一〇三三～一一〇七）、字は正叔のこと。紹聖年間（一〇九四～一〇九八）に涪州（重慶市涪陵区）に流された。『易伝』四卷などがある。これが詩において「詩聖」の語を杜甫に対して用いた最初の例であろう。この詩の存在によって王嗣奭の詩が杜甫を「詩聖」と称する濫觴となったとする説は否定されなければならない。

散文においてはどうかだろうか。黄省曾（一四九〇～一五四〇）

字は勉之の「上李崆峒書」(『文章弁体彙選』卷二三八)を見よう。

昔李・杜詩聖而文格未光、柳・韓文叢而詩道不粹。

昔李・杜は詩聖にして文格は未だ光^{かがや}かず、柳・韓は文

叢にして詩道は粹ならず。

これは李白と杜甫を並称した例である。茅坤(一五二一〜一五〇一)、字は順甫が、字は子木、白石と号した蔡汝楠(一五一六〜一五六五)に与えた、「与蔡白石太守論文書」(『文章弁体彙選』卷二四〇、『明文海』卷一五五)も李・杜と並称する。

……故李杜詩聖而韓欧文匠。其間不自量力、……

……故に李・杜は詩聖にして韓・欧は文匠なり。其の間は自ずから力を量らず、……

李・杜はいうまでもなく李白と杜甫、韓・欧は韓愈と歐陽脩を指す。明代に入っても李白と杜甫はともに「詩聖」として並称されていたことがわかる。

おわりに

『杜詩詳注』諸家詠杜は最後に金埴の「説杜詩詳註」と題する詩を三首収める。第一首の冒頭に次の句がある。

杜陵遺老才非凡 杜陵の遺老 才は非凡なり

詩史詩聖称名咸 詩史 詩聖 名を称すること咸^{あまな}し

一縑推出自機杼 一縑 惟^{ただ}に出ずること機杼よりするのみ

百味不共人甘鹹 百味 人の甘鹹を共にせず

金埴について『杜詩詳注』は「会稽」と記すのみで一切が不

詳であるが、詩において清代には杜甫を「詩聖」と称することがほぼ定着していた。

このように見てくると「詩に聖なる者」という言い方は南宋期から始まったと見てよい。しかし、葉燮の『原詩』外篇上、あるいは楊万里の「江西宗派詩序」が杜甫を「詩に聖なる者」と称する嚆矢となったとする見解は修正されなければならぬ。管見においては元・任士林の「浄香亭記」こそがその最初であるからである。また「詩聖」の語については、王嗣奭ではなく、明・費宏が詩においてこの語を用いた最初の人であると理解するべきであろう。

注

- (1) 吳仲勝『杜甫批評史研究』(中国社会科学出版社、二〇一二)、「第二章、宋金元杜甫批評」に詳しい。
- (2) 王琦『李太白集注』卷三六では、屈又升「采石題太白祠、四首」としてこの詩が引かれる。
- (3) 同詞典は③として「指清杜澹。」といい、④では「泛指傑出的詩人。」として清趙翼「一蟻」詩を引く。
- (4) 『漢語大詞典』は「文」を脱する。
- (5) 霍松林校注『原詩』(人民文学出版社、一九七九)によれば、この発言は孫奕『履齋示兒編』偏枯対に基づく。
- (6) 楊万里と徐積を指す。徐積(一〇二八〜一一〇三)、字は仲車。『宋史』卷四五九に伝がある。

〔付記〕

諸橋『大漢和辞典』は、「①古今第一の詩人。詩のひじり。」と述べた後に②として、「唐の杜甫の異称。李白を詩仙といふに對す。」といい、まず葉燮（字は星期）の『原詩』を引き、ついで李綱の「序」を引く。

子美集諸家之大成、明清學者、始以聖字推杜、如楊慎謂李白神於詩、杜甫聖於詩、王漁洋謂李白飛仙語、杜甫聖語、故後世對於李杜、有詩仙・詩聖之稱、葉星期原詩云、詩聖推杜甫、若索其瑕疵、而文致之、政自不少。

子美は諸家の大成を集む、明清の學者は、始めて聖の字を以て杜を推す、楊慎の李白は詩に神に、杜甫は詩に聖なりと謂い、王漁洋の李白飛仙の語、杜甫聖の語と謂うが如し、故に後世 李杜に對して、詩仙・詩聖の稱有り、葉星期の原詩に云う、詩聖は杜甫を推すと、若し其の瑕疵を索めて、文もて之を致さば、政すこと自ずから少なからず。

李綱の「序」が何に基づくものかは確認できなかったが、「王漁洋……」の一文は、王士禛（一六三四～一七一）の『居易錄』卷五に、「嘗戲論唐人詩。王維仏語、孟浩然菩薩語、劉昫虛・韋応物祖師語、柳宗元声聞辟支語、李白・常建飛仙語、杜甫聖語、……。蘇軾有菩薩語、有劍仙語、有英雄語、独不能仙語・聖語耳（嘗て戯れに唐人の詩を論ず。王維は仏の語、孟浩然是菩薩の語、劉昫虚・韋応物は祖師の語、柳宗元は声聞辟支の語、李白・常建は飛仙の語、杜甫は聖の語、……。蘇軾は菩薩の語有り、劍仙の語有り、英雄の語有り、独り仙語・聖語あること

能わざるのみ）。」とある。